

【秋の見学会参加記】
駒沢史学会秋の見学会 荒川区の史跡探訪

岩津 啓太

平成十九年度の駒沢史学会・秋の見学会は、十一月二十三日（金・祝）に行われた。今回は当会会員である荒川ふるさと文化館副館長の野尻かおるさんのご案内によって、小塚原刑場跡などの荒川区南千住周辺の史跡散策と、荒川ふるさと文化館の展示を見学することが目的であった。

当日はうす曇りの落ち着いた天候の中見学会は行われた。まずはJR南千住駅に集合し総勢十三名で、駅から程近い延命寺に向かい、供養のために建立された首切地蔵を見た。この周辺がかつての小塚原刑場跡となる（地蔵は移設）。首切地蔵は坐像ながら3メートル近い高さがあり、間近で見るとその大きさに圧倒される。しかし、かつては幾多の人の最期を見守ってきたであろうこの地も今は常磐線と日比谷線の二本の線路に挟まれた限られたスペースとなっており、首切地蔵も高架を走る列車から見下ろされている風景は時の流れを如実に感じさせてくれる。今回の最も感じたことはこの「時の流れ」であった。

続いて延命寺と常磐線によって分断された回向院に回り、『解体新書』の翻訳時に杉田玄白らが腑分けを見学したことを記念した「観臓記念碑」や安政の大獄で処刑された橋本左内・吉田松陰などの墓を見学し、旧宿場町を通り抜けて素戔嗚神社に向かった。ただ時の流れはその変化を顕著に感じさせてくれた。



観臓記念碑は戦災で被害にあった碑からレリーフだけを取り外して鉄筋の回向院の壁面に埋め込んだものであり、橋本左内の墓はコンクリートで作り返された建屋に囲われ、その周辺に墓地の区画整理のために集められた志士の墓が終結させられていた。かつては宿場として栄えていたであろう南十住の商店街はいまやシャッター通り。祝日の日中だということのあまりに閑散とした町並みは、「なんだこの町、正月か！」という通行人の言葉にすべてが表されていた気がする。その後、素戔鳴神社で富士塚と瑞光石を見た後、隣の荒川ふるさと文化館を見学した。

ふるさと文化館では館所蔵の「皆川号外コレクション」の特別展示と、区の歴史を分かりやすく展示した常設展示を見た。ここは非常に図録類が安く、企画展などの図録が二〇〇円〜四九〇円で手に入るというのが学生には大変ありがたい。文化館をゆっくりと見学しての後半戦は、千住製絨所跡のレンガ塀の脇を通り抜けて、「これぞ下町」というような路地を通り抜け、円通寺へ。

千住製絨所跡はかつて東京スタジアムがあった場所でもある。こここのレンガ塀は見るだけで明らかに時代を感じさせる風情があるのだがマンション建築に伴って撤去の危機にさらされているという。円通寺は彰義隊を祀ることが唯一許された寺院であり、彰義隊士の墓や上野戦争のあとを伝える寛永寺の黒門（移築再建）や板碑など多数の史料がある。この円通寺で見学は終了し、町屋に都電で移動して、もんじゃ焼きを食べながらの懇親会となった。今回の見学会は下町の雰囲気と、近世から昭和にいたる時の流れを味わうことができ、大変有意義な体験となった。